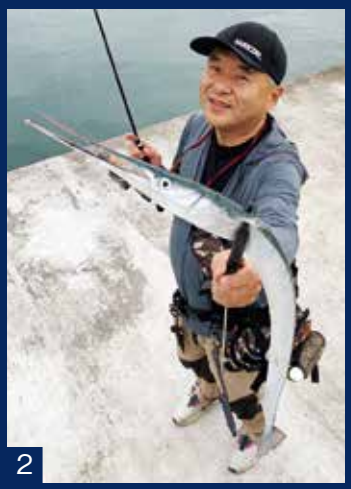
FFGビジネスコンサルティングの

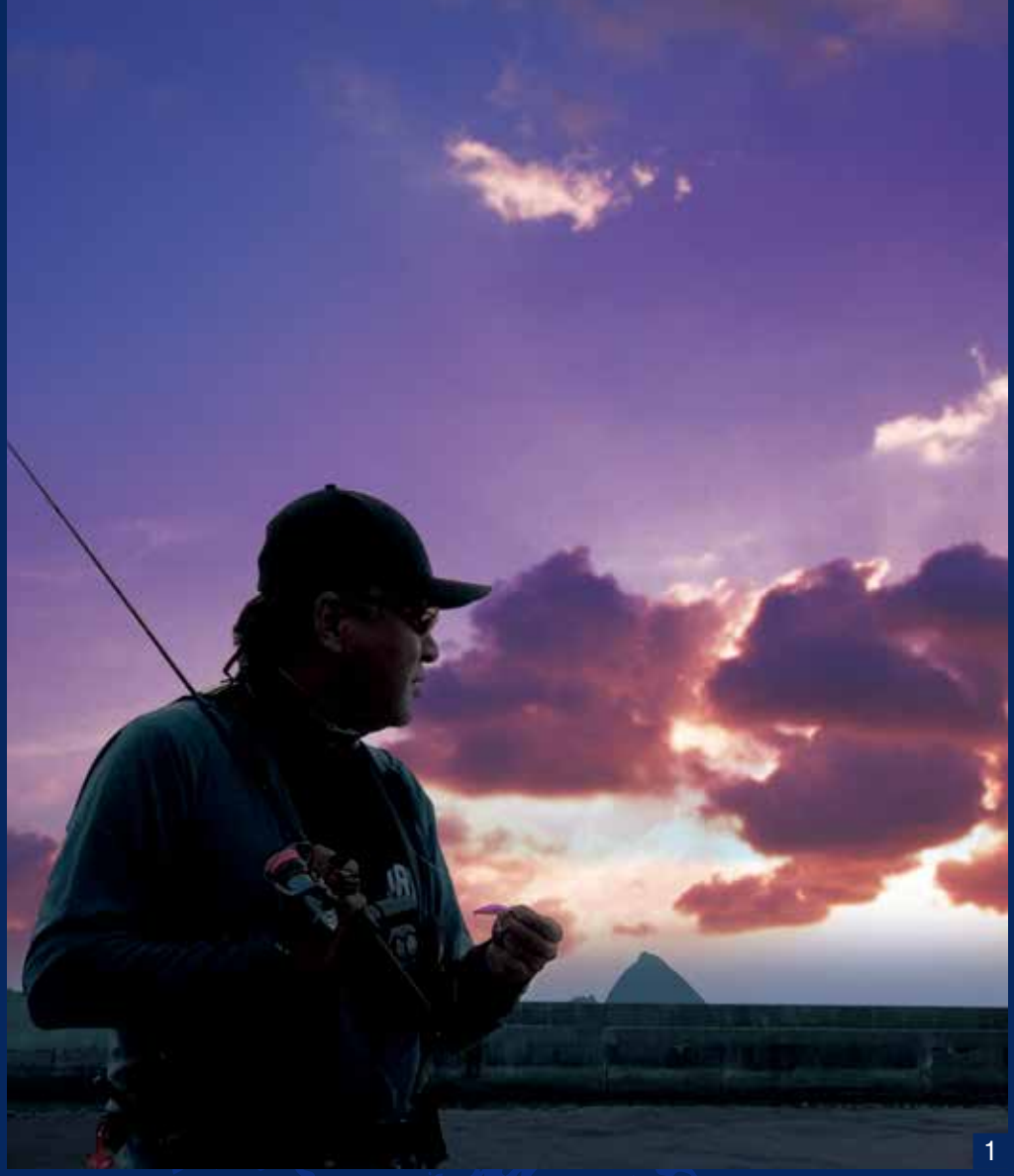
ちょっと釣り道（つりみち）

［九十九島編］



2

3



1

①ポイントを臨む筆者　②釣れたダツと記念撮影　③カワイイアラカブはリリース!

本日の釣り道は九十九島にてダツを釣る

こどもの頃、九十九島という響きは特別だった。

福博の町で生まれ育った筆者にとって、夏休みに友達から聞いた九十九島の思い出と土産話はキラキラ輝いていました。今ほど各地にリゾート地もなく、観光名所も少なかった時代。なかなか旅行にも連れて行ってもらえなかった自分にとって、そこは夏休みの眩しい太陽の光が、碧い海に緑の島々が点在する景色に、燦燦と降り注ぐ憧れしかなかった名勝でした。

大人になると、時間さえあれば自由にそこに行けるようになった。自由にそこに行けるようになった自分は大人になったと実感できた。そして、そこで自由に釣りができるようになった自分は、その景色の中ではいつまでもこどもの気分のままでいられました。

日本本土最西端の地もある長崎県佐世保市の佐々町。ここは西海国立公園に指定され、いわゆる九十九島の一部を形成します。東シナ海の末端に面するリアス海岸の沿岸部は南海からの海流も当たり、数々の良好な漁場・釣り場を提供してくれています。そんな数ある漁港のひとつに筆者は佇んでいました。もう夕暮れというより、宵闇せまる時間帯です。

夕陽の残滓が映える水面は、複雑な潮流でさざ波が立ち潮目ができています。そこに小魚の群れがたくさん見えたその刹那、水面の下が一瞬、ぎらついたような気がしました。そこに、輝くメタルジグという金属片を投げ込む。すると水面が爆発し道糸とさお先が絞り込まれました。

細長い魚影は、水面で弾け回りようやくその姿を現す。1m近い体長を持つそれは南洋からの使者「ダツ」。その鋭利な口吻を持つ矢のような魚体は、光に突進する性質から夜に潜水する漁師からは恐れられています。

そんなダツにちょっとだけ残念な気がしながらも、幼い頃からの想いにわずかに満足が加わった気になり、筆者はため息をつきます。ダツとの闘いで見逃した日本最西端の夕陽を明日も見れないかなと思いながら。